

やさしさが咲かせる花

松本 猛

「この花は、ふもとの村の／＼にんげんが、／＼やさしいことを ひとつすると／＼とつ さく。／あや、おまえの あしもとに／＼さいている 赤い花、／それは おまえが／＼のう さかした 花だ。」

これは山姥が少女に語る言葉だ。漆黒の画面に帯状に連なって咲く色とりどりの花の横で、小さな少女が足元の真っ赤な花を見つめている。はじめて絵本『花さき山』を見たとき、この場面の美しさに心を打たれた。

絵本の名作『花さき山』が誕生して50年を迎える。児童文学作家の齋藤隆介と版画家・切り絵作家の滝平二郎が生み出した絵本は数多い。なか



『花さき山』の表紙絵

たきだいら・じろう (1921~2009) 代表作に、いずれも齋藤隆介作で「花さき山」「モチモチの木」「半日村」「八郎」「三コ」ほか。1970~77年に朝日新聞日曜版に切り絵を掲載

さいとう・りゅうすけ (1917~1985) 『ペロ出しチョンマ』で第17回小学館文学賞、『天の赤馬』で第18回日本児童文学者協会賞ほか。滝平二郎との作品のほか『ひさの星』(いわさきちひろ・絵)、『齋藤隆介全集全12巻』

絵本「花さき山」50年 黒の中 イメージ深く広く

私は東京から版面の講習に来た滝平さんと会った

それから10年ほど秋田で地方紙の記者などをし、上京した齋藤は、機関紙「日教組教育新聞」に毎月1回童話を連載することになる。挿絵を誰にするかと聞かれた齋藤は「素朴で力強くしかも自在な描写力をもった木版画を思い出した」と滝平の名前をあげる。以来、滝平は5年間、毎月挿絵を描き続けることになった。

このときの仕事が齋藤隆介の代表作となる短編集『ペロ出しチョンマ』(1967)に結実する。「花さき山」はこの『ペロ出しチョンマ』のプロローグとして書かれた短編童話である。

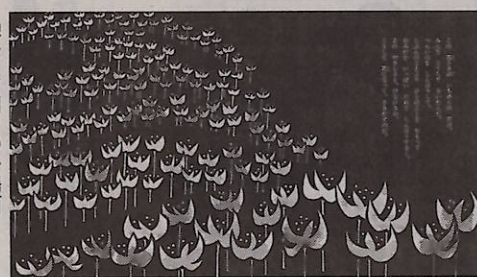
1969年、滝平二郎はグループ展に「花さき山」を題材にした切り絵の連作を出品した。それを見て感動した岩崎書店の編集長小西正保は絵本制作を依頼する。滝平は我が意を得たり、と思っ

たのか二つ返事で承諾したという。小西は「どちらかといえば観念的な短編の世界をかくもめぐりに視覚化している」ことに驚いたと回想している。

絵本『花さき山』の表紙は黒い背景のなかに主人公あやが立っている。当時、黒い表紙の絵本はなかった。冒頭の4場面も黒い背景が続く。絵本には明るい色彩を使うのが当たり前だった時代に、黒が主張するこの絵本の出版はかなりの冒険だった。しかし、『花さき山』は多くの人の心をとらえ、講談社出版文化賞の第1回「ブックデザ

イン賞」を受賞する。齋藤隆介は「一行でも、とりはずすと、私の家はつぶれる」というほど、自分の文章にこだわった。短い童話であつても、その背後には深く広がるイメージがあり、それを一語一語、選び抜いた言葉で構築したのだから。行間に込められた齋藤の思いを滝平は視覚的に想像して楽しんでいただけない。

『花さき山』に使われた黒は、その深く広がるイメージを暗示する。黒という色はすべての色をふくんでいる。黒い紙から切り出された白い造形



『花さき山』の一場面

〈あらすじ〉 山菜取りで道に迷った10歳のあやは、一面に花の咲く山奥で山姥に会う。山姥は、人間の優しい行いが花を咲かせ、命がけの行為が山を生むと語る。里に戻った後、再び花さき山を探すが見つからない。でも、あやはそれから時々、いまおらの花がさいてるな、と思う。

部分に施された色は、黒のなかにひそんでいた色が顔を出したように感じられる。

齋藤隆介の創作童話は自己犠牲を促す要素があるといわれることがある。「花さき山」にも登場する「八郎」や「三コ」の物語の主人公は身を犠牲にして庶民の生活を守る。「花さき山」では、あやが妹の祭りの着物を買うために自分は我慢する。

しかし、八郎や三コやあやが他の人のためにがんばると花が一つ咲く、という話の本質は、自己犠牲にあるのではなく、庶民や弱い立場の人のために行動する生き方こそ価値があると語っているのではないだろうか。齋藤隆介を作曲家に例えるならば滝平二郎は曲の思想をもっともよく理解する最高の演奏者だったといえるだろう。

(まつもと・たけし 美術・絵本評論家、ちひら美術館常任顧問)

文化の話題